

災禍と日本人

——震災・飢饉・疫病——

佐藤弘夫

1. 疫病神はなぜ「神」だったのか

近年、世界的な規模でコロナウィルスが猛威を奮っている。前近代の日本では、流行病をもたらすウィルスや菌は「疫神」「疫病神」と表現されてきた。この言葉自体は現在でも使われているが、興味深い点は、人間に病気や死などの不利益をもたらすものに対して、「神」という形容が用いられている点である。

疫学の知識がなかった前近代では、感染症は遊行する疫病神がもたらすものと信じられてきた。邪悪な作用を本務とする疫病神は、可視化されるにあたって、奇妙でグロテスクな容姿で描写された。しかし、重要なのは、いかに忌み嫌われようとも、疫病神はどこまでも「神」だったことである。そのため、流行病を防ぐための基本的な対応策は、疫病神を敵とみなして叩き潰すのではなく、手厚くもてなして、満足してお帰りいただくという方法がとられることになった。

ときに、より強力な善神の力を借りて、疫神を退散させるという方法が用いられることはあっても、基本的に、力づくで退治するという手段は論外だった。疫病神は敬意を払うべき存在ではあっても、人が正面から立ち向かうような相手ではなかった。人の健康に有害なウィルスや菌を人類の敵とみなし、その根絶を目論むようになるのは、近代特有の現象だったのである。

この変化の背後に、感染症に対するどのような認識の変化があったのだろうか。

2. 日本列島の宿命としての災禍

現代の日本に住む私たちは、よほど運が悪くない限り、平均寿命前後の歳まで生きることを当然のことと考えている。しかし、こうした共通認識は戦後にな

って初めて定着したものだった。少し時代を遡れば、人は明日の命もわからない無常の人生を過ごしていた。生まれ落ちた瞬間から、櫛の歯が描けるように、この世から人が消えていく時代が長く続いてきた。

人が生命を失う最大の原因が飢饉だった。東日本では飢饉は冷害から始まった。中世では大規模な飢饉に直面すると、多数の集落が瞬く間に消滅した。人と土地の結びつきが強まり、安定した村落が営まれるようになる近世でも、江戸時代の四大飢饉クラスの災禍に見舞われると、数年のうちに地域人口の何割かが減少することは珍しい出来事ではなかった

人はただ生存するために、あらゆる努力を傾けた。口にできるものは、野草から樹木の皮まで食べ尽くし、馬や牛などの家畜から犬猫・人肉までが食料となった。その一方で、口減らしのために、「間引き」と呼ばれる赤子殺しや人身売買が行われた。この列島に、かつて命の選別が日常的に行われるような時代があったのである。

健康な体であれば心配する必要のない感染症も、抵抗力を失った身体では防ぐことは不可能だった。飢饉に襲われた地域では、必ずといってよいほど疫病の流行が伴った。人々は、そうした病をもたらして、命を奪うものたちを、「神」と規定するのである。

3. 人類に警告するコロナウィルス

なぜ神でなければならなかったのだろうか。前近代の社会では、人生はこの世だけで完結することはなかった。生と死の世界は緊密に繋がっていた。いつ死ぬかわからないような不安定な時代であるからこそ、死後の命運はきわめて重要だった。その二つの世界を媒介する役割を担っていたのが、人間を超えた存在＝神だった。

人は疫病で命を落とすことを単なる偶然やたまたまの不運と捉えるのではなく、神の意思と考えることで、その死の必然性を受け入れようとした。繰り返される生と死の循環のなかで、神を介在させることによって、次生でのあり方が

少しでもよい良い方向に向かうことを願った。

こうした発想は、感染症に対する科学的な知見が共有される現代社会では、もはや受入れられることはない。コロナウィルスは戦って撲滅する対象ではあっても、敬意を払おうとする人はだれもない。

しかし、私たち人間にコロナウィルスを非難する資格はあるのだろうか。いま人間の生活が環境に与えた影響によって、世界各地で異常気象が相次いでいる。東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故は、人類がみずからを滅ぼすだけの力を身につけたことを、まざまざと見せつけるものだった。

人間とはいえば、こうした地球規模の危機に力を合わせて対応するどころか、人種・宗教・国籍を口実にした対立はますますエスカレートしている。私自身を振り返ってみても、地球に負荷をかけることがわかっていながら、いまの便利で快適な生活を手放すことはできない。この地球にとってもっとも危険な存在は、実は人類そのものなのである。

ときに命を奪われるケースがあっても、人はウィルスや菌なくして、いつときも生きながらえることはできない。ウィルスは人類よりもはるか遠い時代から、この地球に存在していた。コロナウィルスの蔓延は、特権的な地位にあぐらをかき、地球そのものを滅亡の危機に晒している人類に対する、共棲者からのきびしい警告のサインなのである。

私たちはコロナウィルスを仇敵としてのみ捉えるのではなく、ときには共棲者としてのウィルスが発するメッセージに謙虚に耳を傾けてみる必要がある。それが流行病を神の仕業とみなし、森羅万象が調和を保って共存すること＝「草木国土悉皆成仏」を理想と考えた、過去の人々の知恵に学ぼうとする姿勢ではなかろうか。